

コミュニティ福祉学部 授業紹介「家族福祉論」

大夙賀 政昭

(まなびあい運営委員／編集委員／コミュニティ福祉学科 2004 年卒業)

1. コミュニティ福祉学部授業紹介の試み

「まなびあい」では、在校生、教員、卒業生の集うプラットフォームとして、年1回の研究大会に加え、本誌への寄稿などを通じて様々な情報交換がなされています。

「まなびあい」設立当初から、卒業生としてその運営にかかわってきた私は、大学の今、大学における在校生の学びを記録として残していくことが重要と考えています。

ここ数年、仕事や子育てにかかわる時間が増え、まなびあいの活動に参加できていませんでしたが、コロナ禍の状況下で、まなびあいの活動もWEB会議を中心としたオンライン形式で実施されるようになったことがきっかけで、また運営にかかわるようになっていきます。

そこで知ったことが、2020年度の立教大学の授業がすべてオンラインで実施され、在校生はキャンパスに行くことすら許されていないということでした。このため、大学における教員、在校生、その他学びにかかわる様々な方々との交流がオンラインで展開されている今を再び「まなびあい」に関わるみなさまに紹介できればと思い、2014年に寄稿した授業紹介の企画を再び行うこととしました。

2. 今回取材してきた講義の概要と学んでほしいポイント

今回取材してきたのは、「家族福祉論」という講義科目で、まなびあいの運営委員であり、かつ卒業生（2002年卒業）でもある岡桃子先生が担当しています。

1年次以上が履修できるコミュニティ福祉学部福祉学科の選択科目となっていますが、今年度はオンライン開講となったことから216名が受講し、福祉学科のみならず池袋キャンパスの在校生も45名ほど履修しており、履修生数や履修生に占める他学部生の割合はいずれも例年より多い状況ということでした。

この「家族福祉論」では、「問題を抱えておられるご家族の場合、ご家族というコミュニティごと支援する」そして「狭義の家族に責任を負わず、その人を取り

まく環境を含め、広義の家族として捉えなおす」といったことを学ぶことを目標にシラバスに14回の講義計画が示されています。

1. 家族の定義と機能
2. 自身の家族像
3. 多様化する現代家族と福祉ニーズ
4. 家族福祉の歴史と課題
5. 家族支援の対象と方法（1）
6. 家族支援の対象と方法（2）
7. 家族支援の資源
8. 家族支援の展開
9. 事例から見る家族支援①（高齢者虐待・認知症高齢者等）
10. 事例から見る家族支援②（障害・アルコール依存症等）
11. 事例から見る家族支援③（ひとり親家庭・児童虐待等）
12. 事例から見る家族支援④（ヤングケアラー）
13. 家族福祉の展望
14. 総括

講義はおおむねこのシラバスに沿って展開され、前半には家族福祉を支える家族や家族支援の理論部分に関する講義、後半はゲストスピーカーを呼んでの現代社会における様々な切り口からの家族福祉に関する講義が組み立てられているのが特徴です。

岡先生によると、この家族福祉論の受講をきっかけに「自分にとっての家族を見つめなおす」、「いろんな家族のあり方があると知ってほしい」という思いがあることと、学んでほしいポイントは、以下の3つであるということでした。

- ①人は、とりまく環境（家族や地域コミュニティ）の中で生きている生活者であり、狭義の家族に責任を負わず、その人をとりまく環境を含め、広義の家族として捉えなおす「生活モデル」を学び、要援護者を取り巻く家族・地域の特色を活かす視点を養うことが大事である。
- ②問題を抱えておられるご家族の場合、ご家族というコミュニティごと支援するには、風通しのよい連携（地域ネットワーク・職場チームワーク）と窓口が必要である。
- ③ソーシャルワーカーは、必要な資源がなければつくる（環境を人に適合させる）、資源を紹介するだけでなく、いかにつなげ、つながった後も継続して使えるようフォローできるかを考えるクリエイティブで正解がない面白い仕事である。

3. 実際の講義の様子

本原稿を書くにあたって、実際の講義の雰囲気を感じるために、岡先生の許可を得て第12回目の最終講義を傍聴させていただきました(2020年7月21日3限)。この日は、川原秀夫氏をゲストスピーカーに招いて講義が展開されました。

川原秀夫氏は、特別養護老人ホームに18年勤務後、1999年に認知症の方の宅老所「きなっせ」を開設。同年7月に特定非営利活動法人コレクティブを設立、同法人の理事長に就任されています。この「きなっせ」の運営にかかわりつつ、小規模多機能型居宅介護サービスの制度化に取り組み、2007年から2018年までは全国小規模多機能型居宅介護事業者連絡会の代表を務められ、現在小規模多機能事業所6か所をはじめとする各種介護サービス事業所を運営されています。このほか現在、熊本県災害派遣福祉チームを率いて、人吉市・球磨村の避難所支援にもあたられています。

また、故森本佳樹立教大学名誉教授は、川原氏が代表を務めるコレクティブの法人立ち上げ時からの理事であり、深いつながりがあり、そういった縁からも今回ゲストスピーカーに来ていただくことができたということでした。

講義冒頭、岡先生から、今回川原氏のお話を聞いて学生に学んでほしいことの動機づけがありました。

まず、福祉の専門領域は、高齢・障害・児童など領域ごとに分かれているが、家族や地域から見てつなぐ視野を養ってほしいということ。そして、長年、地域に密着した介護事業所の運営や地域活動を通じて地域における支援のネットワーク化に取り組んできた川原氏のお話を聞いて、これはどのようにしたら行えるのか、これらのことと家族福祉で学んだことの関係性を考えてほしいということでした。

また、さきほどの故森本名誉教授が作り上げてきた在校生と大学関係者、実践家、地域住民による縁にかかわってきた川原氏のお話を聞いて、そうした縁が今の立教大学コミュニティ福祉学部の学びの歴史と特徴があることを知ってほしいという意図もあるということについて説明がありました。



図1 講義中の岡先生と川原氏の画像

また、講義開始時には川原氏から学生に対して事前に出された以下の問いについて、学生の主な回答が紹介されました。

- Q1 災害（地震や豪雨など）が行ったとき、要介護高齢者は本人が望んでいなくても家族と離れ離れになり、施設に預けられます。その時のお年寄りの気持ちは？
- Q2 ご本人の願いとご家族の願いが異なることが多くあります。「施設なんかはいりたくない」VS「頼むから施設にいて」など。このような時貴方が支援者であったらどのように関わりますか。

Q1については、慣れない環境で不安が大きいのではないかと。災害があったときこそ安心できる家族と一緒にいたいものなのに、施設入所はそれと矛盾する処遇ではないかといった意見があった一方、お年寄りの心身の健康の保持を考えると、施設に預けた方が安心であり、難しいといった意見もありました。

Q2については、両方の意見を聴く。本人の気持ちを第一優先にする。話し合いの場を設けるといった意見が示されていました。

事前に講義に関する質問を投げかけてもらうことで、講義中に展開される現場で起こる矛盾や解決困難な状況における判断、そこで問われる価値観についての動機づけが行われていました。

その後、川原秀夫氏の講義が展開されました。

まず、現在活動されている人吉市・球磨村の避難所支援では、災害によって引き裂かれる家族がいてそれを支援する上での災害福祉の重要性についてお話がありました。

その後、地域密着型サービスとして2003年に介護保険制度におけるサービスとして制度化された小規模多機能居宅介護の特徴や、本人・家族を支えるためには、目の前のひとりひとりを支えるために、いろいろな支援をその人に合わせて実践することの重要性についてのお話がありました。

最後に、「実践者としてのこれから」についてお話がありました。ここでは主にこれから進む人口減少社会を予測し、地域のありようがこれまで以上に問われること。そして、1事業所レベルでは地域をデザインする介護は担えないため、「地域単位のつながりがより重要になる」といったことや「連携・協働、統合化」といったことが求められることについてお話がありました。

そして、これらの多くの活動は「亡き森本佳樹氏に支えによって学び実践したことである」というご説明がありました。

学生の質問としては、「コロナ禍での被災地支援は大変と思うがその苦勞は」と

という質問がありました。川原氏からは、「被災者と話し合うことすらマスクや距離などがあって難しいことがあるが、信頼関係を築くまで話し合うようにしている」といったことや「職員の移動に伴う感染リスクを最小にするために災害支援専従職員を置く工夫をしている」といったお話がありました。

最後に、岡先生による講義の総括として、コロナによる影響を受け、大学における講義がすべてオンラインで行われるという大変な状況下であるが、このような時こそ、教員と学生で共に授業を作り上げていきたい。オンラインだからこそ今回も川原さんをお呼びすることができた。こうしたきっかけを大事にしてこれからも学びを続けてほしいというお話がありました。

4. 履修学生へのアンケートおよびインタビュー

これまで岡先生の話や傍聴した最終回の講義の様子をもとに授業を紹介してきました。岡先生の協力を得て、履修学生に対し講義後に講義でも活用したゲートルフォームによるアンケートを通じて「①講義を選択した動機」、「②講義のおすすめポイント」、「③講義を通じて学んだこと」、について聞き、24件収集することができました。

また、このアンケートにおいてインタビューへの協力意思を示してくれた4名の学生（社会学部社会学科2年山本陽菜さん、コミュニティ福祉学部福祉学科4年笹木優希さん、コミュニティ福祉学部スポーツウェルネス学科1年石田優奈さん、コミュニティ福祉学部福祉学科1年齊藤ゆいんさん）に対し、同様の質問についてインタビューをオンラインにて実施しました（2020年9月21日）。

その結果について、紹介していきたいと思います。

1) 講義を選択した動機

講義を選択した動機については、「福祉に関する専門科目をできるだけ取る中でとった」、「福祉に関する専門科目の中でも、広く学べそうな家族という言葉が入った科目をとった」といった自らの学びのプロセスにかかわる理由や、「自らの家族問題について学びを深めてみたい」という自身の抱える問題に関わる理由、そして「岡先生の他の講義科目を履修し、違う岡先生の科目をとってみたい」という担当教員にかかわる理由もありました。この他にも「オンライン講義になり、池袋キャンパスの学生でも新座の科目履修が容易になったから」という理由もありました。

2) 講義のおすすめポイント

講義のおすすめポイントとしては、「誰にもかかわりがある家族という身近な

テーマの学びを深めることができる」、「実際に起こった具体的事例をもとに、家族に関する問題を考えることができる」、「多様なゲストスピーカーの話が聞けて、多面的に家族福祉を考えることができる」、「性の考え方が変わる」「リアクションペーパーやアンケートを通じて、様々な学生の意見を聴くことができる」といった意見が寄せられました。

この他には、他学部からみた意見として「自分の学部で展開される講義の様子と比較して生徒と教員の距離が近い」、「講義後で課せられる課題が、抽象的な内容が多く、自らの経験や考え方を通じた思考が求められ、自らの考えをまとめるきっかけになる」といった意見も寄せられました。

3) 講義で学んだこと

講義で学んだこととしては、「ひとりの生活者を意識してひとりひとりと向き合う」、「人とのかかわりには一歩踏み出してみる」、「ある事象を一面的に捉えるのではなく、様々な立場から多面的にとらえる」といった岡先生も講義のポイントとして強調していた、ソーシャルワークの基本となる人や人が抱える様々な課題との向き合い方についての意見が多く聞かれました。この他には、「家族のイメージを自分の家族から広げることができた」といった家族に関することや「授かり婚への認知の違いを知れた」といった意見もありました。

また、「重要な他者との出会いを大事にする」、「さまざまな他者を意識した問題の構造への意識、その解決の方法」、「複数人を対象とする課題解決における調整の際、価値の対立がおこりうること、その際には、ねばりづよく説明を行い、寄り添うことが重要であること」といった家族に代表される複数の人間関係をとらえる構造についての意見も聞かれました。

さらに、岡先生の仕事や家庭生活の経験談、パートナーに主夫として家事の大半を担ってもらっていることなど、プライベートの話を通じて、女性におけるワークライフバランスについて改めて考えるきっかけになったという意見もありました。



図2 インタビュー時の画像
(左上から時計回りに山本さん、笹木さん、齊藤さん、石田さん)

5. 取材を通して感じたこと

1) オンライン講義への対応とリスク

取材を通して、オンラインであっても在校生が講義にまじめに取り組んでいることやオンライン環境下でも在校生のアクティブラーニングを引き出すためにも様々な工夫を、岡先生をはじめとする講義を担当する先生方がなさっていることを実感しました。

取材を通して、オンライン講義を自宅からする難しさや、学生の注目を100分受けながら講義を展開しなくてはならず、匿名アンケートや自らを開示しないまま音声を講師に届けることによる誹謗中傷リスクなどがあることも知りました。オンラインならではの新たな学びが大学教育において展開されている一方で、こうしたリスクや困難への対応が求められていることを知りました。

2) コミュニティ福祉学部における学びの特徴

一方、今回の取材（講義傍聴や履修学生へのインタビュー）においても、講義内容を咀嚼し、自ら考えることで自分に何ができるか、社会に何が求められているかを真摯に考えている学生の姿をみることができました。

また、家族福祉論の最終講義に川原氏をお呼びした「縁」が、故森本佳樹教授にあったというエピソードや、実践に重きをおいた講義や演習やゲストスピーカーによる語りをとおして行われていたという家族福祉論の授業の様子から、立教大学コミュニティ福祉学部における学びの特徴が、まさに開学当初からの臨床実践と知の交差を経てかたちづくられ、それは今も脈々と受け継がれていることを実感しました。このことは、インタビューにおいて他学部の学生が指摘していた教員と学生の近さ、リアクションペーパーにおける学生と教員とのやり取りにおける自学部との違いにも象徴されているものと感じています。

3) まなびあいの活動の今後に向けて

今回の取材を通して得られたこのような一卒業生の気付きは、まなびあい活動の意義のひとつであり、今後も様々なかたちで活動が展開されていくことを期待します。

2014年の原稿では、以下の言葉を結びに記しました。

「今後、コミュニティ福祉学部の学びの現在が、卒業生やその他コミュニティ福祉学部関係者に様々な形で周知されるよう、次号以降も学会誌まなびあいでの企画や特集の検討をお願いしたいと考えております。」

この言葉を再掲するとともに、私自身その活動に何らかの形でかかわっていきたいと考えております。